徒は同志會を組織し內に在つては義勇奉公の說敎をなし外に在つて慰問使を派して出征軍人を慰問奬勵し、忠實に國民たる道を盡した」と叙述してあるが、日露戰爭の條下で「國民擧つて戰爭に狂奔せる際、キリスト敎徒の一部に大膽明白直截に非戰論を力說したる大勇猛心のありしことを錄しておく」と論評するあたりを見ると、いふところの科學的方法も價値判斷を避け得ぬやうであるが、この點について比屋根氏の意見を徵したいものである。

なほ氏は「現代の宗敎界の實に混沌たるを見て自失せざるを得ない」といつて大正十二年間の宗敎史について「混沌裡に彷徨して茫然自失せる」を訴へ「好意ある憐愍の視線」を要求してゐらるゝが、社會的評判といふことゝ史的要求といふことを一致せしむる必要はないのであるから最近史に對する觀察は極度に範圍を狹め切磋隨順のいづれにしても師弟の際ぐい反照的一點に集中するならば困難を感ぜらるゝほどのことはなからうと、思ふがまゝを忠告しておく。猶予は本書に對しては他日いづくかに於いて論評しようと思つて居る。（井上右近）

彙報

佛敎學第一研究室

一、十月二十日

淨土と涅槃　金子敎授

浮土と涅槃との兩概念の論理的關係を論じ終つて茶話會にうつり、曾我氏よりいと面白き質問出で頗る盛會なりき。

一、十二月十四日

眞宗に於ける現世祈禱論　河野敎授

多數敎授、學生參會し盛會なりき。

佛敎學第二研究室

十二月七日　月曜日

本研究例會として左の講演を第七敎室に午後三時より開く。

史上の龍樹は三人也　寺本敎授

當時聽衆學長以下數名なりき。因みに寺本敎授の研究ははじめて本學內の諸敎授に發表せられたる譯なるが未だ首肯するに至らなかつた。

人文學研究室

人文學科研究旅行

十一月一日午前六時三十分　二條驛發
二日午後八時三十分　歸着

若狹小濱妙立寺に義門師の跡を訪ねその文書を觀る。ついで小濱舊城内に伴氏の跡をたづぬ。遺墨數點參考史料尠からず敦賀にて一泊松原の西福寺に寫經を拜觀、朝鮮の佛敎畫夜叉の幅を觀る朝鮮の華嚴美術としておもしろきものなり。歸途長濱に共濟文庫及本願寺別院參觀、龜田、橋川、神田敎授外學生上參加、大いに得る所ありしを喜ぶ。

史文學會大會

十一月十四日(土)午後一時より
於大谷大學第一敎室

講題　漢山の遺物　文學博士　今西龍氏
東條義門の國語學について　文學士　龜田次郎氏

本學敎授學生並に外部よりの聽衆者も多く頗る盛會なりき。今西博士の講題は最近の時事問題として興味を惹けり。龜田氏の熱辯、且詳細なる研究を發表せらる。尙東條義門に關する本學その他諸方の所藏本を陳列して參觀に供す。

哲學研究室

十月二十二日午後七時

歷史と自然科學に關するクールノーの所說につきて　若栗敎授

十二月八日午後六時

本年度最終例會を以て本學敎授鈴木弘氏歸朝歡迎會にあて同敎授の滯歐感想談あり頗る盛會であつた。

□いろ〳〵の事情で今までその議はありながら決定するに到らなかつた本室學會組織變更の件につき遂にその機到來し去る十一月下旬より再三協議會を開き十二月八日の例會閉會後も亦その點につき凝議し大體その成案を得た。何れ詳細は次號の本欄に發表せらるべきであらうがその要點を左に揭げておかう。

一、會名變更　大谷大學哲學會とする。

一、研究發表を學生中心として開き、以て學生に研究の機を與へ其指導助成を目的とすることにした。

編輯室だより

□ずいぶんに寒く、そして枯風がふきまくつて來る。幸に讀者諸兄姉の御健在であらうことを祝し、そして又そのやうに年送り年迎ふるであらうやうに諸佛諸神にいのりをさゝげずには居られない。

□本誌もこゝに第六年を送り近く第七年の新月を迎ふるべく祝福されて居る。永い來つ方を反省すること年四回刊行の本誌がたつた一度定められた如くに刊行されたのみ。此の年三回になりはてた本誌の業病がやつと今年において少し許り回復されたことを讀者諸氏に對して僅にきくかきこえずの聲で申上げて宿病の一日も早く全癒せんことを共にいのるであらう。

□こゝに本誌がいつも例の如く頁數においてうすく、例の如く遲刊することは讀者諸氏に對して誠に詫のしやうもなきことである。まことにその實情を知らぬものには編輯子の怠慢に不誠實にその全責任をおく方もあるやうであるが、編輯子にとつて之れほど面白くないことはない。豫定の如く發行せんと、六、七の玉稿を掲載するに少くとも十五、六、時には二十數氏にまでもおそきは一、二ヶ月、早きは四、五月以上も以前からそれ〴〵分擔して玉稿を依頼しその承諾を得ておくやうに努力に努力を重ねてやうやく昨今の如き小刷誌に終り兼ねて遲刊せしめられる情態である。もちろん寄稿家諸氏及編輯子のみの問題ではなくしてかゝる實情の病根をさがして見れば意外の點にそれが存するかも知れないと思ふ。こに角なかには半年も前から依頼してやつと頂けるものもあり、又四、五月前からおねがひして居たものでお斷りをいただいたものなどがある始末である。殊にこの間にあつて尙も有力な障碍は經濟上の問題である。こがらしは冬のみふきまくるのであるが、本誌と云ふ小さな細弱い一本の木にはいつも夏冬とはずにこがらしがふきまくつてくれる、やつと原稿が豫定頁以上に集つたとなると經濟風にふきまくられ、やつとその風がふきやんでも原稿難が襲來してなか〳〵理想的に編輯が出來ないのであると云ふことを御承知ねがひたい。併し不誠實と不熱心とを人に對して責める前に自己自らに加ふべきであることを嚴かにも知られる。我々もふきまくる風にたえ、げんかう難にもめげず、層一層佛教學界の爲めにつくすべく努力するであらうことを深き反省の上に諸氏に誓言しておかう。

□考へて見るに最近我國佛教界において今年ほどいろ

〳〵問題を引き起した事はない。大正藏經の續々刊行されたること、東亞佛敎大會の我國に開催されたること、東本願寺相續問題の喧傳されたること龍樹問題の益々紛糾したること宗立大學の設立の續出なぞ鳴物太鼓入りで頗る賑しくあつた。併しそれが佛敎の精神其者の上に何物が加へられたであらう。げに佛陀のたましひは生けるものである。彼の說く所は生きんがためである。むしろ彼の生そのものゝ表現であつた。宗敎的生活は生きることである。然るに現代の佛敎を論ずるもの如何程に彼れの生命をその研究にその說敎に灑がれて居るであらうか、否ぞれ程に彼等の研究が彼等の說敎が彼の生そのものであらうか。かくて佛敎を學ぶものも語るものも須らく一考を自己に加ふべきであらう。

殊に最近龍樹問題について一、二の敎授を中心として頗る盛んに論議されて居り、且近く去る七日の日も本學内においてその講演會が行はれたのである。甲論乙駁紛糾に紛糾を重ね、最近には龍樹の數の問題に變化して行かんとして居る情態である。併し何れ近く本誌上において此の龍樹問題に關し、批評的且學問的立場から明快に論述され以てその歸趣を暗示すべきであらうことを敢て讀者諸氏に豫め告げておかう。

□此の十二月を以て本會委員の中編輯部において廣瀨、上杉兩敎授、物部、藤井、達の三氏、大河内、高柳兩研究科學生の滿期解任の期に達しその後任推薦を本會の歷史に循つて去る十月下旬の本號の編輯會の時それぞれ決定し非公式乍ら依賴したるところ突如として被推薦委員の一より問題と抗議を提出されて來た。茲において委員決定が推薦に依り且つ拒否すを得ずとされて居た創會以來の歷史がもろくも破棄せられたのである。ほんたうにそれはよいことでありしかわるいことでありしかは時が指示するであらう。兎に角こんな問題の爲めに本次期委員の決定が未だに中有に漂浪して居る始末であるから次號卽ち新年第一號の發行も遲延するであらう(?)と云ふことをおそれて不滿足ながら大方諸氏の御耳にまで傳へるであらう。たゞ我々はこの問題の一日も早く解決し以て本會、そして又本誌の將來により榮光あれかしと念願しつゝあるものである。

(一二・一八・K・T)

前號所載先德餘香正誤表

頁	行	誤	正
一〇一	四	山陽父子餘	――――余
一〇三	七	鴨有亭宴	―右――(力)
	八	一遇也	―隅―
一〇三	十二	酌末盡	―未―
一〇四	二	餘聞	余―
一〇四	十	香鎖	―銷